

1920年代のフランス共産党の出版活動： 1921-1930(2)数量的分析

SAGARA, Masatoshi / 相良, 匡俊

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Society and labour / 社会労働研究

(巻 / Volume)

39

(号 / Number)

4

(開始ページ / Start Page)

212

(終了ページ / End Page)

242

(発行年 / Year)

1993-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00006312>

1920年代のフランス共産党の出版活動

—1921—1930—（2）数量的分析

相 良 匡 俊

はじめに

1920年12月に成立したフランス共産党は、創立から1930年末までの10年間に800点近い冊子体出版物を刊行した。この800点近い出版物の目録は当該時期のフランス共産党の知的活動を示すものであるが、同時に800回近く繰り返された、活字媒体を利用するメッセージの伝達という行為の痕跡をも示している。したがってまた、この目録はフランス共産党を中心として生まれたコミュニケーション空間の痕跡と考えることもできよう。本稿の目的はすでに作成されている目録①を利用して当該時期のフランス共産党のコミュニケーション空間の特質と、その変容を明らかにすることにある。

とはいえ、このコミュニケーション空間は数量的な広がりにおいて、共産党の組織と一致するものではなく、また目録に収録された出版物のみがコミュニケーション空間を維持した唯一の活字媒体であったというわけでもない。そこで、フランス共産党の運動の広がりと各種の活字媒体によって結ばれた全コミュニケーション空間の広がりとを数量的に検討しておく必要がある。

まず、1920年代のフランス共産党の組織を構成した党員の数は、アニー・クリーゲルの研究②によれば、5万弱と推定される1923年から1933年の推定3万前後まで、なだらかに下降線を描いている。1930年の推定値が4万弱であるから、1920年代全体について、ほぼ4万人台と考えることができる。一方、全国的な選挙における共産党の得票数は

これに比してはるかに大きい③。当該時期に実施された下院議員総選挙は1924年と1928年の二回あり、前者における得票数は約87万票、後者においては約106万票であった。約百万という数値をもって、この時期のフランス共産党の運動体のもっとも外側の枠組を想定することができよう。なお、この時期においては、女性は投票の権利を認められておらず、投票総数は前者においては約890万、後者においては935万であった。共産党の得票率は前者では9.8%、後者では11.4%である。

一方、全国的な範囲で共産党が利用しえた最大の活字媒体は新聞であった。最大規模のものは1905年以来フランス社会党の機関紙であり、1920年末の社会党の分裂の後に共産党の所有に帰した『ユマニテ』である。この新聞の発行部数は、1920年代については不明であるが、1936年の党大会で公式に表明された数値によれば④、1930年の平均発行部数はほぼ17万4千部であった。この数値は1933年の15万5千に向けて下降し、翌年になって黨員数と同様急上昇に転じている。1920年台全体としては、ほぼ20万を下回る程度とみなすことができよう。

全国規模で党中央が発行していた機関誌は三種あった。これら定期刊行物に関する数量的データはタルタコヴスキによって明らかにされている⑤。もっとも発行部数の多いものは『カイエ・デュ・ボルシェヴィスム』で2000部、この内、定期講読者への販売が約850、市販されるものが約900であった。『コレスポンダンス・アンテルナシオナル』の発行部数は1600、定期講読が約550、市販されるものが約290であった。『アンテルナシオナル・コムニスト』はもっとも発行部数が少なかった。700部発行されるものの内、定期講読者への販売は約350、市販されるものが約170である。数値はいずれも1930年末のものである。

本稿のコルプスを構成する冊子体出版物は体裁、規模、価格、したがってまた出版部数から頒布の範囲にいたるまで多様である。もっとも大いなのは、1920年代末から刊行された『レーニン全集』を別とすれ
巻本として出版されたジャン・ジョレスの『フランス革命の社会

主義的歴史』であるが、一冊当たりについてみれば、もっとも規模の小さいものは表紙共紙で表紙を含めて16ページのパンフレットであり、もっとも規模の大きいものは682ページにおよぶ『第五回大会から第六回大会までのコミンテルンの活動』であった。価格についてみると、もっとも廉価なものは0.15フランの上掲パンフレットであり、もっとも高価なものは上掲『レーニン全集』の豪華版で40フランであった。

個々の出版物の発行部数はいまでは確認することができない。だが、タルタコヴスキは概略的な数量的データを明らかにしている^⑥。これによれば、ほぼ平均して印刷部数は3000であった。だが、1931年の調査によれば、刊行点数の3割が印刷部数の半数以上を在庫として抱えていた。

おそらく理論機関誌の定期講読者層が共産党の中核的活動家層の相当部分を構成しており、冊子体出版物の読者層はこの中核的部分と重なりながら、やや広く分布していた。冊子体出版物によって結ばれる空間の範囲は、共産党の期待としては3000人程度であったが実際には1500人前後から2000人程度の規模であったと推定することができよう。

この空間こそが本稿における分析の対象である。だが、メッセージの受け手に関して今日では何らの手掛かりが得られない以上、本稿における作業は、主としてメッセージの送り手と、送られたメッセージに関する観察に限定せざるをえない。だが、以下の作業を通じて、私たちは、伝統的な記述資料の読み取りからは得られない、若干の知見を得ることができるであろう。また観察によって得られる結論が既知の知見であるとしても、異なる手法による追認の作業がまったく無意味であるとはいえない。

ところで、作業を開始するに先立って、先行する業績について触れる義務があろう。ここで取り上げる必要があるのはただ一点、タルタコヴスキの第三課程博士論文『党の学校と党の出版機関 1921 - 1933。フランス共産党の幹部養成に関する試論』である。この論文は形成期のフ

フランス共産党において幹部活動家層がどのように養成され、またどのような理論的教育がおこなわれたかをみることによって、「新しい党」の成立の過程を描こうとしたものである。そして、これを明らかにするに際して、彼女は一方で党学校の活動と、他方において党の下に設置された出版機関の活動を分析している。本稿の作成にあたって後者の分析は不可欠のものであった。だが、技術的にみれば、党学校で訓練された活動家層と、出版活動における受け手とは一致するものではない。フランス共産党が所蔵する豊富な原資料を利用して作成された彼女の業績の値打ちを減ずるものではないとはいえ、二つの対象を同時に観察し、しかも活動家とその脳裏に納められた理論として結合することには困難がある。後に刊行された段階では⑦、論旨は基本的に党学校の分析に絞られ、出版活動に関する記述は大きく後退している。本稿作成にあたって、主として利用したのは、パリ第一大学社会運動史・労働組合運動史研究センターの所蔵する博士論文である。また本稿との関連でいえば、彼女の分析は党直営の出版機関に重点がおかれており、党の周辺にあった諸機関の活動が軽視されている。また彼女においては、ある種のジャンルの出版物に十分な価値が与えられていない。文学作品、歴史的著作などは第一線の活動家の養成に重要な意味をもつものではなかったとしても、これらもまた、共産党のメッセージの一端を担っていたのである。

なお、以下においては一冊に製本されたものを一点と数えることとする。上掲のジョレスの作品は8点と計算される。また個々の出版物について収録したデータは、著者名、書名、刊行機関名、出版年である。以下の分析においては、この四つのデータのみが数量的操作の対象となる。なお、確認することのできた出版物の総点数は770点であった。

註

- ① 相良匡俊「1920年代のフランス共産党の出版活動-1921-1930-(1)目録」『社会労働研究』第36巻第4号(1990年3月), pp. 27-76. なお、この目録を公開したのち、主としてフランス社会史研究所所蔵の共

産主義運動関係文献目録 (INSTITUT FRANÇAIS D'HISTOIRE SOCIALE, *Le Communisme: Catalogue de Livres et Brochures des XIXe et XXe Siècles*, München / London / New-York / Paris, 1989) によって、未収録の出版物に関するデータを手に入れることができた。また、これと同時に、私の目録に相当数の誤りがあることが判明した。これらは訂正、および補遺として本稿末尾に掲載する。また目録の作成のプロセスで著者は「フランス共産党の出版活動の成立」, 立正大学文学部西洋史研究室 [村瀬興雄先生古稀記念西洋史学研究論叢・政治と思想], 1983, pp. 283 - 311. を発表している。ここには主に共産党の出版活動を担った諸機関の系譜が描かれている。文献目録の作成作業の進展とともに、この論考に記されていない機関がいくつか存在したことが明らかになっている。

② KRIEDEL, Annie: "Le Parti communiste français sous la IIIe République (1920 - 1939): mouvement des effectifs et structures d'organisation" in: *Le pain et les roses*, Paris, 1968, pp. 176 - 233.

③ CAMBELL, Peter: *French Electoral System & Elections since 1789*, London, 1958, p. 97 ; p. 99.

④ COSTON, Henri (sous la direction de): *Partis, journaux et hommes politiques d'hier et d'aujourd'hui*, Paris, 1960, p. 486.

⑤ TARTAKOWSKY, Danielle, *Ecoles et Editions communistes. Essai sur la formation des cadres du P. C. F.* Thèse de Doctorat du IIIe cycle soutenue à l'Université de Paris VIII, 1977, p. 489.

⑥ Op. cit., p. 256 et suiv.

⑦ TARTAKOWSKY, Danielle: *Les premiers communistes français*, Paris, 1980.

第一節 刊行点数の推移

本稿において分析の対象となるコルプスを構成する770点のうち、刊行年代を確認できない11点を除いた759点の刊行年次別分布は表(1-1)の通りである。

表(1-1)年次別刊行点数の推移

年 度	1921	1922	1923	1924	1925	1926	1927	1928	1929	1930	不明
刊行点数	102	78	50	65	103	69	59	81	75	74	11

表(1-1)から読み取りうることは次の二点である。すなわち、(一)まず1921年から1923年に向けて刊行点数は半分に減少し、最大値を記録する1925年から1927年に向けて再びほぼ半減する。そして緩やかではあるが、1928年から1930年にかけて刊行点数の遞減傾向が現れる。(二)刊行点数の多い年と少ない年とでは、量的振幅は相当に大きい。(一)の動きはすでに明らかにされている出版機関の整備によって説明が可能である①。すなわち、1922年には共産党の出版活動が「ユマニテ出版社」に集約され、26年から27年にかけてこの活動の「ユマニテ出版社」から「出版局」への移管が実施され、1928年以降になると、出版活動は「出版局」と「国際社会出版」を二本の柱として再編され、1930年になると、小規模なパンフレットを専門に刊行する「革命出版」が創立される。

だが年度毎の出版活動の規模、ないし活発さは出版機構の制度的変更だけで説明がつくわけではない。本稿においては、量的振幅の説明は一義的な目的ではないが、クロノロジカルな流れを理解するためにも、周知の年代的データを挙げておくことが望ましいと思われる。

フランス共産党は一般に1920年に誕生したとされる。この年の12月25日からトゥールで開催された第18回フランス社会党大会の最大のテーマは第三インターナショナル加盟の是非を巡る討議であった。加盟に関する動議は29日に投票に付され、賛成の動議が3208票、対抗する二つの動議が各々1022票と60票を獲得し、加えて棄権票44という結果によって可決された。翌30日、1905年に成立した「社会党(労働者インターナショナル・フランス支部)」は実質的に分裂し、多数派は「社会党(共産主義インターナショナル・フランス支部)」と名乗ることになった。

この時、多数を得た第三インター加盟派は翌1921年5月、機構確立のための大会を開催し、さらに同年12月末に第一回全国大会を開く。本稿に関わる同党全国大会は1922年の第二回、1924年の第三回、1925

年の第四回，1926年の第五回，1929年の第六回である。ついでながら「共産党（共産主義インターナショナル・フランス支部）」を正式名称としたのは1922年1月以降である②。

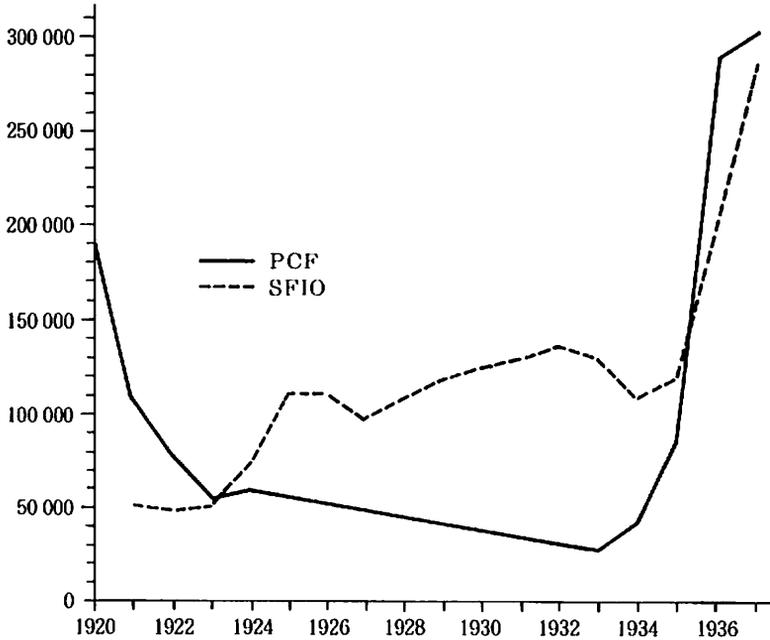
一方，1921年には6月から7月にかけて第三回共産主義インターナショナル（以下コミンテルンと略称）大会が開催された。またこの大会にはほぼ並行して，赤色労働組合インターナショナル（プロフィンテルン）第一回大会と青年共産主義インターナショナル第二回大会が開催された。このように関連組織の国際大会を並行して開くことは慣例となり，1922年の第四回コミンテルン大会，1924年の第五回大会，1928年の第六回大会に重ねて，それぞれの組織の大会が開催されている。なお1930年には例外的にプロフィンテルン第五回大会が開かれている。

このほか，フランス共産党の成立の後に労働総同盟の分裂によって生まれ，共産党と密接な関わりをもった統一労働総同盟（C.G.T.U.）の大会が1922年の第一回の後，1923年，1925年，1927年，1929年に開催されている。

また後に示すように出版活動の活性化の一つの要因となる選挙についてみれば，上述したように，1924年と1928年に下院議員総選挙が実施され，1925年と1929年には市町村議員総選挙がおこなわれている。

出版活動の盛衰に関連して，共産党の党員数の推移を考える必要があるかもしれない。これについての概略は上に述べた。付け加えるならば，トゥール大会で多数派となった代議員は178372人を代表していたが，機構的に共産党が充足する1921年にこの党に加わったものはほぼ10万余りである。この数値は1924年の約6万にまで急激に減少し，ここから1930年の4万人以下を経て1933年の極小値3万にまで緩やかに低落する。この曲線は1921年から1924年頃までについては出版物の刊行点数の波と並行するが，その後の時期については相関しない。なお，トゥール大会少数派，すなわち1920年以降フランス社会党を名乗り続ける党派の規模は分裂直後には5万前後であったが，1925年頃から1930年

表(1-ii) 共産党ならびに社会党の党員数の推移
(クリエゲル上掲論文, p. 203)。



代初頭に至るまで10万人前後の党員を擁していた^③。したがって、党員数という点からすれば社会党は1920年代後半においては、共産党の倍以上の規模をもっていたのであるが、この政党はこの期間、年間平均10点程度の出版物を刊行したに過ぎなかった。この点からしても、この時期の共産党の出版活動の旺盛さはこの政党に独自の相貌を与えているのである。

註

- ① 相良匡俊, 上掲「成立」参照。
- ② ROBRIEUX, Philippe, *Histoire intérieure du Parti communiste*, Tome IV, Paris, 1984.
- ③ KRIEGEL, Annie, op. cit., p. 203.

第二節 主題

770 点の文献の内容を分類し、集合的な意味において、フランス共産党の知的関心の対象圏の変容を把握することが本節の課題である。とはいえ、一つの冊子の内容を一つの項目の下に截然と分類することには相当の困難がある。さらに日本国内で現認しうるもの数はコルプス全体の四分の一程度に過ぎない。そこで本稿では少なからざる無理を承知の上で次の手法によって分類する。すなわち、まずタイトルを手掛かりとして、(さらに必要に応じて著者名、その他のデータを手掛かりとして) 取扱い事項を地理的に分類する。ここではフランス、フランス以外の諸国(すなわち外国)、単一の地理的範囲を超えて世界的な動きを扱うものの三種に区分する。地理的区分を超越して一般性、ないし普遍性を持つものの枠を「一般」として設定し、最後に採取したデータから主題を把握しえないものを「その他」とし、合計五種に分類する。ちなみに第三の枠に入るものとしては、世界的危機、世界革命などの他にコミンテルンの活動などの世界的規模において展開されるはずのものを含める。第四の「一般」の枠に含めるべきものとしては、社会主義、共産主義、アナキズムなどの包括的な理論、資本主義社会における事物のありようなどを一般的に扱うものが挙げられる。最後の「その他」として分類されるほとんどはジャンルとしては文学作品に属している。なお、ジャンル別に分類する作業は不可能であり、本稿においてはおこなわない。以下に分類の結果を掲げる。

表(2-1)から得られる所見は次の通りである。(一) フランスに関する文献は全期間を通じて減少する。(40%台から30%台へ)。(二) これに反して、外国に関するもの、世界に関するものの双方が増大する。(前者は20%台から30%台へ、後者が10%台から20%台へ。また双方合わせて30%台から50%台へ)。この現象はきわめて重要であろう。フランスの一政党がフランスの地理的枠を超えて、他の地域、あるいは

1920年代のフランス共産党の出版活動

表(2-1)出版物の主題別推移

年 度	1921	1922	1923	1924	1925	1926	1927	1928	1929	1930	不明
刊行点数	102	78	50	65	103	69	59	84	75	74	11
フランス (%)	43 42.2	40 51.3	22 44.0	28 43.1	44 42.7	26 37.7	22 37.3	32 38.1	33 44.0	24 32.4	3 27.3
外国 (%)	22 21.6	16 20.5	6 12.0	15 23.1	32 31.1	26 37.7	25 42.4	21 25.0	11 14.7	23 31.1	4 36.4
世界 (%)	12 11.8	8 10.3	14 28.0	14 21.5	12 11.7	7 10.1	5 8.5	21 25.0	15 20.0	16 21.6	3 27.3
一般 (%)	19 18.6	8 10.3	5 10.0	7 10.8	9 8.7	9 13.0	4 6.8	8 9.5	8 10.7	6 8.1	1 9.1
その他 (%)	6 5.9	6 7.7	4 8.0	1 1.5	6 5.8	1 1.4	3 5.1	2 2.4	8 10.7	5 6.8	0 0.0

世界に対してこれほどまでに強い関心を示したことはかつてなかった。より広範な世界への視野の拡大という意味において、また自己の立場や戦略を、世界的な文脈の上で考え、話すという思考と言説のスタイルの新しさにおいて、この数値は注目に値する。だが、ロシア革命、あるいはコミンテルンの活動など、一般のフランス人の生活感覚を超えたできごとを説明しなければ自己を語りえない宿命が、共産党における旺盛な出版活動を余儀ないものとしたとも考えられよう。

(三) 地理的にみて特定の対象をもたず、また時事的特性をもたない、一般的な社会理論、社会主義論などから構成される一般的著作の割合はさほど変化しない。だが個別にみると内容的には大きな変化が見られる。20年代前半には種々雑多な主題と雑多な傾向がみられるのに対して、20年代末には『レーニン全集』に代表される党公認の理論の著作と、それに関する解説書がとって代わる。

(四) 「その他」の欄に含まれるものは、技術上、分類のできない若干の文献を別として、小説、詩、演劇などの作品である。点数自体は無視しうる程度であるが、内容的にみると、ここでも20年代前半においてはフランス人、ことにマルセル・マルティネの作品が多いのに対して、20年代末にはロシア人の作品の翻訳が増大し、「ソヴィエト化」の進展

表(2 Ⅱ) フランス関係文献の内容別刊行点数とその推移

年 度	1921	1922	1923	1924	1925	1926	1927	1928	1929	1930	不明
フランス	43	40	22	28	44	26	22	32	33	24	3
(歴史)	6	6	3	6	7	2	2	2	2	2	0
(戦争)	13	5	2	0	4	0	0	0	0	0	0
(時事)	4	5	5	6	12	10	3	6	9	7	0
(%)	3.9	6.4	10.0	8.7	16.5	14.5	5.1	7.1	12.0	9.5	0.0
(選挙)	0	0	0	0	5	0	0	8	7	0	0
(運動)	20	24	6	16	16	14	17	16	14	17	3
(%)	19.6	30.8	12.0	24.7	15.5	20.3	28.8	19.0	18.7	23.0	27.8

を指摘することができる。

フランスに関して著された出版物の詳細な分析をおこなうことによって、以下の如き傾向を明らかにすることができる。(一) 何よりもすべてについて安定性が乏しく、年毎の刊行点数の振幅が大きい。ことに、戦争(というのは第一次世界大戦であるが)については、これに関する発言に執念を燃やしていた「労働書店」が共産党から絶縁されたことによって、著作目録に関連文献がみられなくなる。

(二) フランス史上のできごとに関する著作も影が薄くなる。これは1920年代初頭、ロシア革命をフランス革命、ないしパリ・コミューンとの関連において理解しようとした思考の努力がおこなわれたことに関わっていると考えられる。

(三) 最近のできごとを説明し、敵を批判するとともにみずからの立場・政策を述べる出版物は、政治的出版活動の基本であるかのように思われるが、このような活動は未だ必ずしも恒常的におこなわれるに至っていない。数量的に少ないだけでなく、年による振幅が大きい。またヴェルサイユ条約、ルール占領、さらには20年代の軍事政策、対外政策などのテーマを引き合いにしながら、一般的なブルジョワ国家における政治体制の批判が展開されることが多く、厳密な意味での時事的な事件に対する対応の準備が整っているとはいえない。けれども、おそらくこのような説明と訴え掛けのスタイルの故に、特定の社会階層、特定の

1920年代のフランス共産党の出版活動

地域を超えて、大衆的なキャンペーンが可能だったのかもしれない。

(四) とはいえ、1925年、29年の市町村選挙、28年の下院選挙におけるキャンペーン活動は注目に値する。選挙に際して多様な主題について、政党の立場、政策を説明する一連のパンフレットを数種発行する(25年、29年)、異なる社会階層に向けて、同様に多様なパンフレットを用意する、という運動形態はフランスにおいては初めて試みられたものである。社会党がこれに近いスタイルをとるのは1928年以降であるが、その種類と数量は限られていた。

(五) 運動という項目のもとに分類したのは共産党、統一労働総同盟、共産主義青年同盟その他の関連組織の大会議事録、決議、組織拡大のための資料である。運動に関する出版物を、組織、および働き掛けの対象となる社会階層別に細分したものが表(2-III)である。なお主要なもの以外は略すことにする。

表(2-III) 共産主義運動に関する文献の種類別刊行点数の推移

年 度	1921	1922	1923	1924	1925	1926	1927	1928	1929	1930	不明
(運動)	20	24	6	16	16	14	17	16	14	17	3
共産党	4	9	1	9	6	5	6	6	7	9	0
労働組合	11	7	3	3	3	3	6	2	3	4	1
青年	0	0	0	0	0	4	1	0	2	0	0
農民	0	5	0	4	3	0	2	4	4	0	0
女性	0	0	0	0	2	1	0	2	0	0	0

上の表からみるならば、(一) 共産党そのものおよび、労働組合運動に関する出版活動は相当程度の安定性を得ているということができよう。(二) これに対して、青年、農民、女性などを顧客層とする運動の出版活動は不安定である。このなかでは農民を組織しようとする運動が相対的に恒常性と安定性を示している。次に「外国」として一括した、フランス以外の地域に関して著された文献をより詳細に検討する。ロシア、ないしソヴィエト・ロシアについて記されたものの圧倒的な量からして、ここではロシアとその他にまず分割する。

表(2-IV) 外国関係文献の内容別刊行点数とその推移

年 度	1921	1922	1923	1924	1925	1926	1927	1928	1929	1930	不明
外国	22	16	6	15	32	26	25	21	11	23	11
ロシア (%)	18 17.6	11 14.1	3 6.0	10 15.4	27 26.2	13 18.8	16 27.1	19 22.6	9 12.0	23 31.1	3 27.3
(革命)	12	5	2	6	9	4	4	2	1	2	0
(現状)	6	6	1	4	18	9	12	17	8	21	3
その他	4	4	3	5	5	13	9	2	2	0	1

表(2-IV)の示すところは明らかである。(一) フランス共産党はロシア革命への共感の有無と第三インターナショナルへの加入の是非を巡る論争を契機として成立したのであって、この点からもフランスの共産主義者の関心が圧倒的にロシアに向けられていたことは不思議ではない。(二) だが、ロシアに対する関心は当初においては革命に向けられるが、1925年を境として、革命によって成立した、新しいソヴィエト・ロシアに対する関心にとって代わられる。

(三) これとは対照的に、ロシア以外の諸地域に対する関心にはムラがある。1926年のヨーロッパ諸地域に関するもの、1927年のアジア・アフリカの解放に関するキャンペーンが突発的に並び、こうした動きは継続しない。もとよりこの動きの背後にコミンテルンの指導を読み取ることは容易である。

次に世界的な範囲をもつ情勢分析、ならびにこれに対応して世界的な規模で展開される運動、なかんづくコミンテルン、その他の運動に関する出版物の年次別刊行点数を示す。

(一) 世界の情勢に対する関心は、この表を見るかぎり高かったとはいえない。点数は少なく、また不安定である。(二) にもかかわらず、世界情勢に対応すべく展開されるはずの国際的な諸運動に関する文献の刊行点数は一般にかなり多い。このことは、フランスの立場から国際的な諸運動に加わるためにこれらの文献が出版されたというよりは、むしろ

1920年代のフランス共産党の出版活動

表(2-V)世界情勢・世界的規模の運動に関する出版物の点数とその推移

年 度	1921	1922	1923	1924	1925	1926	1927	1928	1929	1930	不明
世界	12	8	14	14	12	7	5	21	15	16	3
(情勢)	2	0	0	4	2	3	1	5	1	8	0
(運動)	10	8	9	10	10	4	4	16	14	8	3
(%)	9.8	10.3	18.0	15.4	9.7	5.8	6.8	19.4	18.7	10.8	27.3

表(2-VI)フランス国内諸運動関係文献および国際的諸運動関係文献の和

年 度	1921	1922	1923	1924	1925	1926	1927	1928	1929	1930	不明
フランス	20	24	6	16	16	14	17	16	14	17	3
国際	10	8	9	10	10	4	4	16	14	8	3
合計	30	32	15	26	26	18	21	32	28	25	6
(%)	29.4	41.0	30.0	40.0	25.2	26.1	35.6	38.1	37.3	33.8	54.5
総点数	102	78	50	65	103	69	59	84	75	74	11

ろフランス国内の運動の展開の手掛かりとするべく参照されたと考えるべきであろう。なお、各種国際大会の開催年次と上の表を照合すると、必ずしも対応関係にないことがわかる。

この点からすれば、共産主義運動関係の文献の量的検討にあたっては、フランス国内の運動に関する文献と国際的組織の運動に関する文献の双方を合わせてみる必要があるだろう。

(一) フランス国内の諸運動に関する文献と国際的な運動に関する文献の双方を合わせた総和の占める比率は他の項目に比して相当に安定している。(二) また、フランス国内の運動と、国際的な運動の双方の和についてみれば、コミンテルン大会開催年度にこれらの運動に関して刊行される文献の比率は他の年度よりも高い(24年、28年)。

(三) ところで21年から23・24年、25年から27・28年にかけて総刊行点数が減少するなかでこれら運動関係の文献は比率を高める。これら二つの時期は出版活動に関する機構の整備がおこなわれた時期にあたるが、この機構の整備と並んで、出版物の種類についても淘汰がおこな

われ、運動の理論的理解と確認が要請されたと解釈することができる。

第三節 執筆者層の変容

本節で問題とするのは770点の文献の執筆者である。とはいえ、表紙に真の執筆者の氏名が記されているとは限らない。実際の執筆者の真の氏名が記されている場合もあれば、ペン・ネーム、ないし通称であることもあり、さらには何らかの偽名が記される場合もある。また機関の名称の下に出版されることもあれば、機関名、人名を持たないまま刊行されるものも少なくない。ここでは執筆者として個人名を持つもの、機関名を持つもの、匿名のもの三種に分類して年次別に表示する。なおこの際、フランス人（ないしフランスの組織）によって執筆されたものと、それ以外の外国人によるものとに区分する。ちなみにフランス風の名前を用いて執筆された外国人の作品は外国人の項に含めるものとする①。

下記のうち、仏-外国としてあるものは、フランス人の著作と外国人の著作を合わせて編集したものである。さて、(一)下の表(3-1)から

表(3-1) 執筆者別・年次別刊行点数の推移

年 度	1921	1922	1923	1924	1925	1926	1927	1928	1929	1930	不明
刊行点数	102	78	50	65	103	69	59	84	75	74	11
フランス (%)	74 72.5	50 64.1	28 56.0	35 53.8	51 49.5	32 46.4	24 40.7	39 46.4	37 49.3	26 35.1	4 36.4
(個人) (%)	68 66.7	41 52.6	16 32.0	27 41.5	40 38.8	22 31.9	10 40.7	19 22.6	23 30.7	10 13.5	1 9.1
(組織)	4	3	6	6	5	3	3	12	5	4	4
(匿名)	2	6	6	2	6	7	11	8	9	12	2
外国 (%)	26 25.5	28 35.9	22 44.0	30 46.2	51 49.5	35 50.7	35 59.3	45 53.6	34 45.3	48 64.9	7 63.7
(個人)	19	22	14	19	39	26	28	24	18	38	1
(組織)	4	3	5	5	5	1	3	4	3	0	2
(匿名)	3	3	3	6	7	8	4	17	13	10	4
仏-外国	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
不明	1	0	0	0	1	1	0	0	4	0	0

読み取りうる第一の点はフランス人、ないしフランスの組織などによって執筆された文献が当該時期全体を通じて減少することである。これは言うまでもなく外国文献の翻訳の増大を意味している。

(二) フランス人の手になる出版物に目を向けるならば、特定の個人名を持たないものが増加する。個人名を持つものは20年代前半においては、23年を例外として(57%)、ほぼ80%前後を占めるが、26年以降低減し、29年を例外として(62%)、フランス人による著作の半数に満たない。これにかわって増加するのが個人名に代えて機関名をもつもの、ないし匿名のものである。とはいえ、匿名のものといえども、真の意味での匿名ではない。出版機関名、あるいは書名中に執筆者である機関名が含まれていることが多いのである。これらは匿名であっても、機関の名称の下に刊行されたものと同一視することができる。個人の名において呼び掛けるのではなく、組織の名において呼び掛けるというスタイルが採られているのであって、この場合には教示、ないし指令の伝達という意味が強くなると考えることができよう。事実、このような文献には決議、決定、綱領などの文書が多く見られる。また、機関名をもたずとも、一見して文献の性格がわかるような販売のルートに乗せられたことも推測できるし、さらには一見して文献の性格を知りうるような特定の顧客層に販売されたとも考えられよう。総じて、メッセージの社会的性格は反論を許さぬものとなり、またメッセージの送り手も受け手も狭い範囲に限定されるようになる。メッセージの方向は一方的になり、またコミュニケーション空間は閉鎖的な性格を帯びることになる。

次にフランス人の個人名を著者の名としてもつ文献の著者について、より詳細な分析を試みる。共産党系の著作の執筆者として名前の記されている者のほとんどについてはメートロンの『労働運動人名事典』によって確認することができる。なお、現在刊行中のこの人名事典によって確認出来ない者については、上掲のロブリューの『共産党史』を利用して個人データを検討する。

表(3-Ⅱ)フランス人執筆者の性格

年 度	1921	1922	1923	1924	1925	1926	1927	1928	1929	1930	不明
筆者の数	48	36	13	20	40	23	14	20	20	10	1
刊行点数	68	41	16	27	40	22	10	19	23	10	1
役職者	9	13	6	6	14	9	7	8	5	6	0
刊行点数	22	19	7	13	15	13	6	8	12	6	0
役職者の%	18.8	36.1	46.2	30.0	35.5	39.1	50.0	40.0	25.0	60.0	0
刊行点数の%	32.4	46.3	43.8	48.1	37.5	59.1	60.0	42.1	52.2	60.0	0

偽名の使われているケース（6件）を除いて、各年度ごとにフランス人の執筆者の数、フランス人執筆者の手になる出版物点数、次いで共産党、統一労働総同盟の役職者の数とそれらの手になる作品の点数を示す。なお共産党については1921年の指導委員会、ならびにその後の中央委員会、政治局メンバー、および下院議員、統一労働総同盟については執行委員会メンバーがここに含まれる。

(一) 個人の名をもって刊行される文献の減少にともなって、執筆者の数も減少する。全体として、(二) 執筆者全体のなかでは、振幅をともないながらも党の役職にある者の比率が高まる。詳細に見ると、刊行点数全体にしめる役職者の手になる文献の比率は、1921年から24年にかけて、また1925年から27年にかけて、さらに28年から30年にかけてジグザグに、だが着実に増加してゆく。これら三つの上昇の時期は、いうまでもなく共産党の出版活動の機構整備の時期に重なっている。

執筆者の年齢は一体どのようなようであっただろうか。フランス人執筆者の総数、生年の確認できる者の数、次に比較的若いとみることのできる30代以下のものを算出すると次のようになる。

生年の判明しない者の数が少なくないことから、執筆者の世代別分布を厳密に捉えることは不可能であるが、(一) 漠然とした量的イメージとして、フランス人執筆者全体に占める若手層の比率はかなり高いということができよう。だが、執筆者のうちに共産党、もしくは統一労働総

1920年代のフランス共産党の出版活動

表(3-III) フランス人執筆者の世代別動向

年 度	1921	1922	1923	1924	1925	1926	1927	1928	1929	1930	不明
著者の数	48	36	13	20	40	23	14	20	20	10	1
確認済	25	23	9	16	30	16	9	13	16	8	1
39才以下 %	14 56.0	13 56.5	6 66.7	8 50.0	22 73.3	11 68.6	4 44.4	6 46.2	5 31.3	4 50.0	0 0

同盟の役職者の比率が高いことを考えれば、若手の比重の高さはむしろ組織における幹部層の年令の相対的な低さを示すと考えることもできる。(二) だが、その場合、1926年までの若手層の比率の高さに比して、むしろこれ以後、若手執筆陣の比重が下がる点が注目し値する。これは安定的な執筆者層の成立、あるいは確固たる幹部層の成立を意味するものと考えることができるかもしれない。

同一の著者が複数の文献を執筆しているケースが少なからず見られる。こうした特定の人物によるシェアがどの程度のものであったかを以下に検討する。ここではフランス人執筆者の総数をまず記し、ついで2点以上の文献を執筆した著者の数(n)を、ついでこうした人物の筆になる文献の点数を年次別に記し、最後に個人名を持つ文献の総点数を記しておく。

表(3-IV) 執筆活動の寡占傾向

年 度	1921	1922	1923	1924	1925	1926	1927	1928	1929	1930	不明
執筆者の総数	48	36	13	20	40	23	14	20	20	10	1
n	15	9	3	7	7	4	1	1	2	3	0
同行点数	42	22	7	18	17	9	2	2	5	7	0
総点数	68	41	16	27	40	22	10	19	23	10	1
%	61.8	53.7	43.8	66.7	42.5	40.9	20.0	10.5	21.7	70.0	0

(一) 特定の人物による出版活動の占有はむしろ20年代前半において顕著であり、20年代後半になると、このような状況は崩れる。20年代末に複数の文献を執筆する者が僅かに増加するが、この傾向が執筆活動の寡占化につながるか否かは次の時代の問題であって、ここでは判断

を下すべきではあるまい。(二) 仮に20年代末から新たな寡占化が始まるとしても、執筆陣の顔触れは20年代初頭と20年代末とでは大きな交代がみられる。共産党成立当初に活躍する、古い文筆家ポール・ルイは党を離れ、ラポポール、ドマンジェは党中央から遠い存在になる。終始変わらず執筆者として登場するのはカシャン、ドリオ、マルティ、ルノー・ジャンなどである。重要なテーマに関して記されたパンフレットを大衆的に人気のある活動家の名を冠して出版し、党の下部、ないし党外の大衆に読ませる、一種のスター・システムを指摘できよう。

表(3-V)外国人の個人名をもつ文献と執筆者

年 度	1921	1922	1923	1924	1925	1926	1927	1928	1929	1930	不明
総点数	102	78	50	65	103	69	59	84	75	74	11
(a)点	19	22	14	19	39	26	28	24	18	38	1
(b)人	15	14	12	13	26	21	25	20	19	26	1
(c)人	6	5	7	7	10	11	9	8	5	9	0
(d)点	11	13	10	13	22	16	14	12	6	21	0
c/b x 100	40.0	35.7	58.3	53.8	38.5	52.4	36.0	40.0	26.3	34.6	0
d/a x 100	57.9	59.1	71.4	68.4	61.1	61.5	50.0	50.0	33.3	55.3	0

フランス以外の諸地域の出身者の個人名を冠して刊行された文献(a)が1920年代を通じて増加するのにもなって、執筆者の数(b)も増加する。執筆者のなかで特筆すべき存在はコミンテルン、プロフィンテルンなど国際組織の幹部層であろう。外国人執筆者総数の下にこの数(c)を記し、それらの人々の名前の下に刊行された文献の点数(d)を示す。さらに、執筆者総数に占めるこれらの機関の幹部の比率(c/d)と、個人の名の下に出版された文献の総点数に対する、これら幹部層の作品の比率(d/a)を示す。

(一) 執筆者の数においても刊行された文献の数においても上記国際組織の幹部の占める比率は相当に高い。だが興味深いことには、むしろ1920年代末になると、執筆者総数に占めるコミンテルン、プロフィンテルン関係者の比率は低下してゆく。そして、これに連動して文献の比率

も低下する。これはソヴィエト・ロシアの現状について記されたものが増加し、これにともなっておそらくソヴィエト・ロシアにおける専門家の登場が増えるからである。

(二) 登場する国際組織関係者の氏名は20年代を通じて変化する。前半に多く登場するのはトロツキー、レーニン、ついでジノヴィエフ、ブハーリン、後半に入るとスターリンの名前が多く登場する。こうした登場人物の交代は周知の通り、ロシア国内の勢力争いの結果であって、本稿においては詳述の必要は感じられない。なお1920年代を通じて、もっとも安定的に多くの文献を執筆した者はロゾフスキーであった。彼はフランス労働組合における活動の経験があり、フランスの労働者の間で著名でもあれば人気も高かった。

(三) 労働組合運動についてのロゾフスキー、共産主義運動に関するレーニン、トロツキー、ブハーリン、ジノヴィエフ、スターリンなどにみられるように、重要な指針を個人の名前の下に与えることがコミンテルンなどの国際的運動においてはおこなわれていた。フランス側で作成された文献についてはマルセル・カシャンの名が多様なテーマについて執筆者として登場するが、それも相対的なものであるにすぎず、またその多くは議会における演説をパンフレットにしたものであった。1930年代になると、重要なテーマについて、モリス・トレーズの名が記されることになるが、1920年代においては、いまだそのようなスタイルはとられていない。

最後に出版物の主題と執筆者の関連をみておくことにする。ここでは詳細にわたる分析は省略し、主題に関してはフランス関係、外国関係、世界情勢・運動、一般、その他と分け、執筆者についてはフランス側、ロシアその他の外国人と分け、各テーマ毎の執筆者の性格を観察する。

(一) 下の表から一見して明らかなことは、1920年代を通じて、フ

表(3-VI)各テーマ毎の執筆者の性格

年 度	1921	1922	1923	1924	1925	1926	1927	1928	1929	1930	不明
発行総点数	102	78	50	65	103	69	59	84	75	74	11
フランス関係 (フランス人)	43 41	40 36	22 22	28 26	44 41	26 26	22 22	32 31	33 31	24 24	3 3
(外国人)	2	4	0	2	3	0	0	1	2	0	0
外国関係 (フランス人)	22 8	16 4	6 2	15 4	32 5	26 2	25 1	21 3	11 0	23 1	4 1
(外国人)	14	12	4	11	27	24	24	18	11	22	3
世界情勢・運動 (フランス人)	12 5	8 1	14 1	14 0	12 0	7 3	5 0	21 1	15 1	16 0	3 0
(外国人)	7	7	13	14	12	4	5	20	14	16	3
一般(理論など) (フランス人)	19 14	8 4	5 2	7 3	9 1	9 1	4 0	8 1	8 3	6 0	1 0
(外国人)	5	4	3	4	8	8	4	7	5	6	1
その他	6	6	4	1	6	1	3	2	8	5	0

ランス側とコミンテルン、ないし外国側との間に、ある種の役割分担が成立することである。具体的にいえば、フランス共産党の発言の主題は固行にフランスに関わりのある問題に限られてゆく。そして世界情勢、国外事情、国際的な運動の状況については翻訳に頼るようになる。もとより、国際共産主義運動全体にわたる状況の変化を想定することも可能であるが、フランス側の事情としては、1920年代を通じて、在露フランス人としてソ連の共産主義運動に関わったギルポー、ピエル・パスカル、ヴィクトル・セルジュらが共産党から次第に離れていったことと平行している。また一般の理論も翻訳まかせになる。これは、理論的な著作のプロであったポール・ルイ、ラボポールらが党から、もしくは党中央から離れたことに起因している。(二) この間、フランスに関して外国人が発言するところも少なくなる。フランスの状況に通じていて、しかもフランス人党員のなかで人気のあったトロツキーが排除されたことが大きい。

註

- ① A. BERNARD を名乗ったドイツ人アルフレート・クレラ、J. CHA-

VAROCHIEなる筆名を使ったブルガリア人ミネフがこれに該当する。

② これについては、B. ラジッチ・M.M. ドラチコヴィチ『コミンテルン人名事典』、東京、1980。

第四節 出版機関

最後にこれらの執筆者の文献を刊行した出版機関について分析をおこなう。共産党系出版物を刊行した諸機関についてはすでに別稿に述べてあるので、各々についての詳述は避けるが、フランス共産党が直接に経営に携わった出版機関を以下の通り記しておく。

Librairie de l'Humanité (1921 - 1926)

Bureau d' Editions, de Diffusion et de Publicité (1926 - 1927)

Bureau d' Editions (1927 -)

Editions Sociales Internationales (1928 -)

Publications Révolutionnaires (1930 -)

これ以外の出版機関の多くは国際赤色救援会、国際労働者救援会、プロフィンテルンなどのコミンテルン関連国際組織の出版活動を行った組織、あるいは統一労働総同盟、共産主義青年同盟などの共産党関連国内組織出版部門などであり、ここでは各々に関する詳細を省く。

以下の表においては出版機関の数、党直営の出版機関の数、直営機関によって刊行された文献の点数、およびこれが全刊行点数に占めた比率

表(4-1) 党直営出版機関と非直営機関、およびその活動

年 度	1921	1922	1923	1924	1925	1926	1927	1928	1929	1930	不明	
機関の数	11	13	7	5	12	8	7	8	7	6		
刊行総点数	102	78	50	65	103	69	59	84	75	74	11	
党直営機関 刊行点数 (%)	1 27 26.5	1 36 46.2	1 26 52.0	1 45 69.2	1 61 59.2	2 44 63.8	2 40 67.8	2 48 57.1	2 46 61.8	2 51 68.9	3 0 0	
非直営機関 刊行点数 (%)	10 66 64.7	12 33 42.3	6 20 40.0	4 14 21.5	11 28 27.2	6 11 15.6	5 8 13.6	6 16 19.0	5 10 13.3	3 10 13.5	3 7 0	

を年次別に記す。

(一) 1920年代全体を通して、出版活動をおこなった機関の数は減少するが、ストレートに減ずるのではない。1921年から24年にかけて減少し、25年に再び増加したのち27年に向けて減少し、さらに28年に微増したのち、あらためて遞減傾向を示し、全体として20年代初頭の約半数になる。(二) だが、この期間を通じて、党直営の出版機関の数はむしろ増大しているから、この全体を通じる減少傾向は、党の直接のコントロールの下になかった出版機関の廃止によって生じたものとする事ができる。事実、20年代中葉に独自に出版活動をおこなっていた組織の文献が、20年代末になって党直営出版機関から刊行されるようなケースがでてくる(青年共産主義者同盟、国際赤色救援会など)。

20年代前半の出版機関の減少が「ユマニテ書店」への吸収合併によるものであり、党による統制強化に伴うものであったことは知られているが、20年代後半の減少の傾向は、組織基盤が脆弱で全国的な頒布の能力の低い関連組織の出版活動を肩代わりし、販売活動を一本化する動きによるものであったとも考えられる。

出版点数について、党直営機関のシェアが増大することは上の表から明らかである。1920年代初頭に50%以下であった占有率は20年代後半にはほぼ6割台を維持しており、一方の非直営機関の刊行点数は20年代後半には10%台で推移している。共産党系の出版物はほぼ党直営の出版・頒布機関によって掌握されるようになったということができよう。ちなみに独自の出版活動を維持した数少ない組織は統一労働総同盟であった。

だが、各年次別の刊行点数全体から党直営書店発行の文献の数と非直営機関発行の文献の数を引いてもかなりの残余が存在する。これらは出版機関の名をもたないものである。これらのうちには出版機関の名称に代えて印刷所名をもつものがある。そこで印刷所名をもつもの、何らの機関名をもたないものに分けて作表すると以下の通りになる。

1920年代のフランス共産党の出版活動

表(4-Ⅱ)出版機関名をもたない出版物とその比率

年 度	1921	1922	1923	1924	1925	1926	1927	1928	1929	1930	不明
総点数	102	75	50	65	103	69	59	84	75	74	11
印刷所名あり	3	6	3	2	2	2	4	6	2	3	2
機関名無し	6	3	1	4	12	12	7	14	17	10	2
計 (%)	9 8.8	9 12.0	4 8.0	6 9.2	14 13.6	14 20.3	11 18.6	20 23.8	19 25.3	13 17.6	4 36.4

表(4-Ⅲ)出版機関名をもたず、表紙の一部に組織名を記載した文献

年 度	1921	1922	1923	1924	1925	1926	1927	1928	1929	1930	不明
総点数	102	75	50	65	103	69	59	84	75	74	11
機関名無し	9	9	4	6	14	14	11	20	19	13	4
組織名有り	6	4	3	3	4	5	6	16	8	7	2

このような通常記載されるデータをもたない出版物は21年から25年までについては年平均で全刊行点数の10.6%であり、内容的にみて、発行の責任の所在をぼかすことを目的とするもの、頒布の対象が限定されたもの、恒常的な出版活動をおこなう意志のない集刊のものなどと推定されるものが多い。だが、26年から30年までの5年間については21.3%と倍増する。これらの多くは造本、用紙、活字などから、一見して「出版局」の出版物と判明するものが多く、また「出版局」の出版日録に掲載されているものも少なくない。この点では、1920年代のものとは異なる要因によるものと判断せざるをえない。しかも、これらのなかには著者名として、もしくは題名のうちに共産党、共産党中央委員会、書記局、あるいは統一労働総同盟などの名称が記されている場合が少なくない。出版機関名をもたない上の文献のなかで、表紙のどこかに組織・機関名の記されているものの数を表(4-Ⅲ)にあげておく。

(一) 出版機関名をもたないもののなかで、著者名もしくは題名のうちに組織・機関の名称が含まれるものは、以上のように合計64点を数えるが、組織別にみると共産党とその内部機構の名称をもつものがもっとも多く38点である。次に多いのは統一労働総同盟の6点であり、残

余は国際赤色救援会などのフロント組織である。こうした文献は内容的にみて性格が明瞭である。一つの種類は党大会関係文書など、部内に向けて刊行されているらしいもの、他の一つは選挙を念頭において発行されたらしいものである。これらの点からして、出版機関名をもたないこれらの出版物の多くは、通常の意味での市販の対象とはならない文献であったと考えることができる。すなわち、特定の顧客層、いわば身内に対して向けられたもの、もしくは仮に外部に向けられたものであっても、特定のルートを通じて配付されるべき文献などである。出版機関名をもたない文献の増大は、頒布のルートの固定化、あるいはまた講読者層の固定化を示しているといえよう。

(二) なお上の出版機関名をもたないものの中には、別のルートで頒布されたことが判明するものがある。これは共産党機関紙『ユマニテ』、理論機関誌『カイエ・デュ・ボルシェヴィスム』、フランス語版コミンテルン機関誌『アンテルナシオナル・コムニスト』などの別冊、特別号あるいは付録などの形で発行されたものである。これらの多くは単独で販売されることもあったらしいが、あるものは定期刊行物の販路に乗せて頒布されたらしい。

結論

この種の分析の通例として、作業から明らかにされることは、さして耳目を驚かすようなものではない。まず、フランス共産党の出版活動の変化は1921年から24年まで、25年から27年まで、そして28年以降の三つの波動のなかで進展する。この波動は刊行点数の動きについても、主題の変遷においても、また執筆陣の変化に関しても、さらには出版・頒布の機構についてもいずれも指摘しうるものである。

機構的な側面からみれば、1920年代初頭に存在した小出版機関は党直営の機関のなかに吸収されてゆき、20年代中葉以降、共産党系の諸団体の出版活動も徐々に直営出版・頒布機関のもとに集約されてゆく。

この動きをかならずしも官僚主義的統制の強化と捉える必要はない。むしろ党の直接の指導のもとに、全国的な流通のルートを確認するなかで、合理化が図られたというべきであろう。出版物の流通のルートが仮に一元的であっても、発言の多元性を維持することは不可能ではなく、まして党上層部と下部大衆の間でコミュニケーションの双方向性が確保されることはありえよう。これは別の問題である。

だが、同時に執筆陣の固定化、もしくは出版物の性格の固定化が進むことによって、この合理化は実質的に統制の強化を意味することになる。コミンテルン、ないしロシアの党に由来する出版物の増大、党上層部からの指針の増加が1920年代以降を特徴づけることになる。これはコミュニケーション空間内部の多方向性を失わせ、メッセージの伝達を一元化すると同時に一方向的なものにする。これにともなって話法も変化し、提案、討議などに代わって、教示、指令などの形がとられるようになる。

ロシア伝来の文献については、1920年代末に、すでにのちに「個人崇拜」という言葉によって表現される、特定個人の発言の独占の状況が出現するが、フランス側で独自に作成されるものについては、まだそのような傾向は現れていない。このような現象が1930年代に生じるとしても、それはかならずしも「ソヴィエト化」の結果とみなすわけにはいかない。むしろ、20年代には個人の名の下に発言することを抑制し、機関の名によってメッセージを送る努力が図られた。機関主義とも表現できるが、あるいは単に官僚主義とも呼びうるであろう。一方では、共産党成立以前から、ある種のスター・システム、すなわち定評のある特定個人に特定のテーマを担当させる方式が存在した。古くは農業問題に関するコンペール・モレル、社会主義の歴史についてのポール・ルイがあり、新しくは反軍主義運動のマルティ、青年運動のドリオ、復員軍人問題についてのヴァイヤン・クテュリエなどがあげられる。こうしたスター・システムと官僚制が結びついてモリス・トレーズの体制が生まれる。この仮説によれば、トレーズが党を支配したというよりは、党が求

めて探し出したスターがトレーズであった。

ともあれ、1920年代末には機構の一元化と執筆陣の限定によってメッセージの伝達が独占的、かつ一方的におこなわれるようになる。このプロセスは「ボルシェヴィキ化」ないし「民主集中制」の確立として表現されるが、このようなコミュニケーション空間の変質に対して、他の媒体、すなわち集会、あるいは局地的な活字媒体がどのように機能したかが問題になるであろう。これらについては現在までのところ研究されていない。なお、1920年代末以降、直営出版社の複数化が図られる。一面においてはこれは出版活動の多元化として評価できるが、20年代においては、コミュニケーション空間の多元化に結びつくものとはなっていない。

一方、コミュニケーション空間の物理的変容に対応して、メッセージの種類と性格も変化してゆく。総じてみれば、20年代初頭の、ロシア革命に触発された未来社会論、社会主義運動論、革命論は間もなく姿を消し、モデルとしてのロシア党、ないしロシア社会の紹介が大きな話題となる。独自の視点からフランス社会、ないしフランス国家を観察し、時々刻々の状況に対応する試みははじまってはいるが、革命後のロシア社会と対比して、ブルジョワ国家、ブルジョワ社会一般を非難する段階からさほど遠いものではなかった。その点からすれば、1920年代のフランス共産党は、フランス国家に全面的に対峙する党とはなっていなかったし、またフランス固有の歴史的土壌の上にきずかれた「新しい党」ともなっていなかった。

PUBLICATIONS COMMUNISTES -- ERRATA --

- 049 削除 (Voir 648).
- 065 CELOR, Pierre, *La politique communiste dans la région parisienne (Rapport au Comité régional du 12 août 1930)*, La Région Parisienne du Parti Communiste, 1930.
- 097 DUCLOS, J., *Anciens combattants, souviens-toi!*, L.H., 1925.
- 099 BERTHOY, CORNAVIN, DUCLOS, MULLER, GAUTHIER, MARTY. *Contre la guerre et le militarisme naval*, B. E., 1927.
- 122 削除 (Voir 832).
- 176 削除 (部外者).
- 193 KRYLENKO, N., *La main dans le sac. Espionnage, sabotage et complot contre l'Union soviétique*, B. E., 1930.
- 212 削除 (部外者).
- 283 削除 (Voir 099).
- 346 PEVET, Alfred, *Les responsables de la guerre*, L. H., 1921.
- 380 REED, John, *Dix jours qui ébranlent le monde*, B. E. D. P., (1927).
- 516 削除 (Voir 833).
- 520 PARTI COMMUNISTE, *Athérez au P.C.*, Parti communiste. Agit.-Prop. centrale, 1925.
- 534 *Un an après Lille. Rapport moral et politique 1926-27*, Parti Communiste, 1927.
- 540 GARCHERY Jean, *Le bilan écrasant des finances du Cartel et de l'Union Nationale. Discours prononcé à la Chambre le 10 décembre 1927*, Imprimerie Centrale, 1927.
- 550 MARTY, A. *Le code du travail et la défense des jeunes ouvriers*, L. H., 1926, [Bibliothèque des Jeunesses communistes].
- 563 削除 (Voir 274).
- 565 削除 (確認不能).
- 572 削除 (確認不能).
- 576 PLYNGEREI, Valca, *Au pays du dernier des Hohenzollern. L'histoire d'un crime. La Cootypographie*, [1926].
- 579 削除 (Voir 098).
- 591 削除 (Voir 319).
- 594 PARTI COMMUNISTE, *Les élections législatives de 1928. Le Programme du Parti communiste. Ses buts révolutionnaires. Les revendications immédiates des travailleurs*, Edité par le B. U. I. C.
- 611 PARTI COMMUNISTE, *Impérialisme. Colonisation et Social-démocratie*, P. C., 1928.
- 612 削除 (Voir 080).

- 625 削除 (publiée à Berlin).
- 657 Mémento pour les soldats et marins de l'armée et de la flotte rouge, L. II., 1924.
- 662 *Le Premier Mai. Journée de lutte de prolétariat mondial*, B. E., 1929.
- 664 PARTI COMMUNISTE (S. F. I. C.). *Les problèmes de l'auto-défense. Quelques leçons* PARTI COMMUNISTE, (S. F. I. C.), 1929.
- 682 削除 (Voir 281).
- 689 削除 (Voir 687).
- 705 MARTY, A., *La révolte de la Mer Noire. Ses enseignements*, B. E., 1929.
- 706 CHAMPELL, M., *Une page de l'histoire révolutionnaire. La révolte d'Oléron*, Fédération des jeunesses communistes, 1930.
- 721 削除 (Voir 485).
- 732 削除 (Voir 715).
- 742 *U. R. S. S. et la paix. Recueil de documents 1917-1927*, B. E., 1929.
- 743 削除 (Voir 742).
- 749 削除 (publié en 1933).

- S01 BARBUSSE, Henri. *Au secours de la Russie affamée*, L.H., 1922.
- S02 BOUKHARINE, N. *Les Instituteurs*, Internationale de l'Enseignement, 1925.
- S03 DORIOT, Jacques. *Contre le Plan Young et les traités d'esclavage. Discours à la Chambre des Députés, séance du 13 novembre 1930*, B.E., s.d. (1930).
- S04 GORKI, Maxime. *La révolte des esclaves*, L.T., 1925.
- S05 GRANDJOUAN. *La Russie vivante. Images de la vie soviétique*, Amitiés franco-soviétiques, 1927.
- S06 LOUKOMSKI, G.K.. *L'art dans la Russie des Soviets*, Union des Etudiants de l'U. R. S. S., 1925.
- S07 MARTY, André. *On croit se battre pour la Patrie...*, ?. [Petite bibliothèque de l'ouvrier, du paysan et du soldat], 1925.
- S08 MARX, Karl, Friedrich ENGELS. *Manifeste du Parti communiste*, Maison des Syndicats, 1922.
- S09 PAZ, Maurice. *Les révoltes de la Mer Noire*, L.T., 1922.
- S10 RAPPOPORT, Charles. *Précis du communisme*, Strasbourg, Imprimerie Solidarité, 1929.
- S11 RENAUD, Jean. *Entre paysans*, L.H., 1924.
- S12 RENAUD, Jean. *Congrès national paysan, 1er, 2 et 3 mars 1929 à Montluçon. La situation économique et les revendications des paysans travailleurs*. Edition Comité d'Organisation, 1929.
- S13 SEMARD, Pierre. *Ce que représente la ligne de la majorité confédérale*, Imprimerie française, (1930).
- S14 VAILLANT-COUTURIER. *A la maritime. Pièce en trois épisodes. Chansons de matelots. La révolte de Calvi*, UFMAN, 1928.
-
- S15 *Amnistie! Discussion avec un incrédule*, Editions du Secours rouge international, 1928.
- S16 C.G.T.U. *Appel de la C.G.T.U. et du P.C. pour le 1er mai*, Supplément à l'*Humanité* du 26 avril 1930, ?, 1930.
- S17 *Au pilori, Poincaré, Briand, Loucheur et leurs généraux*, B.E., 1930.
- S18 *La Bulgarie des soudards fascistes, 1925-1927... Un pays dans l'abîme de sang*, Editions du Secours rouge international, s.d.
- S19 *Ce qu'ont voté les élus du 11 mai*, Parti communiste, 1927.
- S20 *Circulaire du Comité Exécutif de l'Internationale des Jeunes aux Fédérations des jeunesses communistes*, L'Avant-garde, 1922.
- S21 *Comment ils préparent la guerre...*, Supplément à l'*Humanité* du 16 juillet 1929, ?, 1929.
- S22 *Compte rendu sténographique du VIe Congrès de l'Internationale Communiste 17*

- juillet - 1er septembre 1928, la Correspondance Internationale.
- S23 *La constitution du socialisme en U.R.S.S.*, Supplément à *l'Humanité* du 5 mai 1929, ?, 1929.
- S24 *Cours du Parti communiste*, P.C.F., 1930.
- S25 *la défense des victimes de la guerre. le bilan d'une législature*, P.C., 1926
- S26 COMITE DU Xe ANNIVERSAIRE DE LA REVOLUTION RUSSE, *la délégation des jeunes ouvriers en U.R.S.S. (1917-1927)*, La Cootypographie, s.d.
- S27 *Dix ans de révolution*, P.C., 1929.
- S28 *L'Italie sous la terreur. A bas le fascisme assassin !*, Editions du Secours rouge international, 1926.
- S29 *Justice de classe et terreur blanche en Allemagne*, Secours rouge international, 1925.
- S30 *Lénine et l'Union de la Jeunesse. Discours prononcé au IIIe Congrès pan-russe de l'Union des jeunesses communistes russes le 2. 10. 1920*, Fédération des Jeunesses communistes de France, s.d.
- S31 *Les marins allemands révolutionnaires en 1917*, B.E., 1926.
- S32 *Pages d'histoire du mouvement ouvrier français*, Comité central du Parti communiste français, 1925.
- S33 *Pour la propagande minoritaire*, Bibliothèque documentaire, 1921.
- S34 *Pourquoi et comment travailler dans les coopératives. Thèses et résolutions présentées à la conférence nationale d'information coopérative des 14 et 15 mai 1927 (P.C.-S.F.I.C.)*, P.C., 1927.
- S35 INTERNATIONALE DES TRAVAILLEURS DE L'ENSEIGNEMENT, *Programme officiel de l'enseignement dans la République des Soviets*, Internationale des travailleurs de l'enseignement, s.d.
- S36 *Rapport moral et politique du Comité de la 4e Entente des Jeunesses communistes, 1926-1927*, B.U.I.C., (1927).
- S37 *Le syndicalisme universitaire en Russie*, Editions de l'Internationale des Travailleurs de l'Enseignement, 1925.
- S38 STALINE, I., *Le léninisme théorique et pratique*, B.E., [1928].